

II. 研究報告

お城の中の大学 —保健管理センター開設のころ—

保健管理センター学校医 津川洋三

金沢大学は昭和24年5月、総合大学として発足した。城の中に校舎のある大学は全国的に珍しく、本部、法・文・理・教養学部がおさまった。なお医・薬・工学部は市内小立野地区にそのままです。

これにともない学生・教職員の保健衛生ならびに健康管理のため昭和26年10月、場内に診療所が開設され、昭和28年12月にはレントゲン機械が入り、直接間接の胸部撮影が実施できるようになった。

診療所は石川門を入れて真直に百メートルほど進むと右手にゆるい坂があるが、坂下の左手にあった兵舎を改造したもので、後、坂の上の本部に隣接する建物に移転した。

診療所発足と共に各科より医師、看護師が非常勤で派遣されていたが、正式名称は「学生部厚生課保健係」所属であった。

私事にわたるが当時内科医院を開業していた父の体調不良と、わたし自身の原因不明の眼底出血により、昭和30年4月、平松博教授が主任の放射線医学教室を辞任、自院を継承していた。

その後、父の病氣も回復し、わたしの眼の方も安定したことで、教授に勧められて昭和30年7月より非常勤で午後、勤務することとなった。

職員と学生さんの健康相談と診察、レントゲン写真の読影であるが、前述のように各学部が入っていたので、文・理の教官方と親しくお話をし、ご教示をたまわる機会に恵まれた。

本丸跡にはスダジイや松・桜・榎、カラスザンショウの巨木。ハゼウルシ、ニシキギ、テンナンショウ、カラスウリ、ウバユリ。雪の積った城垣にはヒヨドリジョウゴの実の赤が美しい。

鳥は何といってもカラス。本丸の大木の枝を畔に、万という数でできていたが、大学が移ってからどこへ行ったのか。少ない。

ヒヨドリ、雀の人里鳥のほか、シジュウカラ、エナガのカラの仲間、小さいキツツキのコゲラが枝を回って上って行くのをよく見かけた。十数羽のウソの群も見た。オスは一まわり大きく頸部が赤い。

平成元年1月、角間地区へ大学の総合移転が始まり、保健管理センターも大学会館内へ、平成5年にはプレハブの仮舎屋に、平成7年2月に現在の本部一階に完成した。

この間にもっとも印象ぶかく思い出すことと言えば、昭和43年3月の東大安田講堂占拠に始まった学園紛争である。

金沢大学にも飛火し、学寮問題、法文学部では人事問題、学生のセクト内の対立である。

日本の新左翼の中核派、革マル派。少しずつ思想の異なる彼らは隊列を組んでマイクで激しく叫び合いながら心身分ちがたく揉み合った。

昭和44年当時の学生部長は理学部物理の丸芳十郎教授、法文学部々長は東洋史の増井経夫教授であった。

温厚な増井教授一人を学生たちは一室に円陣を組んで缶詰にし、交渉は深夜に及んだ。

わたしは校医をしている関係で呼び出され部長の診察を求められた。

ご高齢であるし血圧も高いしただちに解放するよう求めたが、分った、と言って室の外へわたしを押し出した。

あるセクトは丸一ヶ月も教養部校舎や学生会館を占拠し、火焰瓶を投げペンキで壁を塗りたくった。

紛争が終ってから内部へ入ると乱雑そのもの、何しろ
一ヶ月も暮していたのだから…。

落書きの一つが印象ぶかい。

医王山の日の出は美しい。

当時、平等という言葉がどう取り違えられていたのだ
ろうか。教授に対しても、おいお前、で話しかけていた。

親と子、教官と学生、おのずから差別のある平等とい
うものがあるはずであった。

金沢城公園として、観光的にも美しく立派に整備され
てきているが、およそ半世紀を通った城内、何とも懐か
しい。

城跡余情

城跡に聞く町の音うつうつと常ほろびゆく営みの
おと

菱櫓屋根に積む雪突風に飛び散る 鳥のとび立つ
さまに

城門の扉にうてるくろがねの乳鋳^{ちびやう}が熱しはつ夏の
手に

おもふふたつ天正八年御坊落ち69年火焰瓶飛ぶ
学問は政治の下に敢へなしと声寒く説く^{いくさ}戦経し世
代

(2009. 10. 20 記)